蘇ったオリンピック選手と、我が肉声

佐藤　義弘

何気なく視線を落とした先のダンボール箱に思わず引き寄せられ、その中身を、そっと覗いてみた。するとそこには、透明のビニール袋にくるまれ静かに眠っている風の、数多くのカセットテープがあった。その中から一つを取り出して、レコーダーに掛けてみた。

「…さて、観衆が動き始めたようであります。今、円谷、円谷が来ました。円谷が来ました。円谷第二位であります。あっ、その後ろに英国勢が来た。英国勢が来た。円谷、頑張れ、円谷、頑張れ。その差は数十メートルだ。八番のヒートリーが来た。イギリスのヒートリーが来た。その差は十五メーター。

…国立競技場です。円谷の姿見えた。円谷第二位であります。七十七番円谷。そして八番がイギリスのベイジル・ヒートリーであります。ヒートリー、ちょっと差を詰めました。二位か、三位か。銀メダルか、銅メダルか。日本の名誉を掛けて。

日本の円谷、危ない。ヒートリーが追った。ヒートリーが抜きます。ヒートリー抜きました。イギリス抜きました。激しいデッドヒートであります。円谷、どうでありましょうか、あと百メートルの勝負。ヒートリーがぐんぐん差を広げます。その差は、だいたい五十メーターと開いた。今、ゴールインしました。今、円谷、見事に日の丸が振られます。日の丸が揚がります。日本の円谷、疲れました。あらゆる力を使い果たしました日本の円谷、第三位」

国立競技場に入ってから激しいデッドヒートを繰り広げる二人のランナーを時々刻々実況中継するアナウンサーの、緊迫した声が私の耳元に突き刺すように伝わってきた。

マラソンの円谷と聞けば、当時を生きた人で、知らない人はいないのではないか。一九六四年十月開催の東京オリンピック陸上競技のマラソンで、三位入賞を果たした人物である。カセットテープのラベルには、栄光のランナー、円谷幸吉と記されている。東京オリンピックと言えば、今から五十年も前の出来事なのに、その音を

聞く限り、あたかも今目の前でレースが繰り広げられているかのような錯覚に陥り、思わず興奮してしまう。

しかし正直なところ、何故に、数あるテープの中からその一本を抜き取ったものであろうか。あるいは考えるに、それはたまたまの偶然だったのだろうか。再現されるテープの中では力走する円谷だったが、実は彼のその後の人生には、大きな転機が待ち受けていた。次期迫り来るオリンピックに懸ける周りからの大きな期待。それとは相反して怪我や故障に見舞われ思うにまかせぬ現状に苛立ち、大きなプレッシャーを受け続ける日々。そのやり場のない状況の中で八方塞がりとなり、正月実家に帰省した後再び体育学校の宿舎に戻り、そこで、自らの尊い命を絶ってしまった。

『父上様母上様。幸吉は、もうすっかり疲れ切ってしまって走れません。何卒お許し下さい』という悲痛の叫びとも取れる遺書を残して…。書き残された遺書に目を通した文豪の川端康成に、「繰り返される『おいしゅうございました』という、ありきたりの言葉が、じつに純ないのちを生きている。そして、遺書全文の韻律をなしている。美しくて、まことで、かなしいひびきだ」と言わしめ、「千万言も尽くせぬ哀切」と評された。

そんな彼の生涯を思うとき、結果的には若くして自分の人生に幕を下ろしたのだが、オリンピック、マラソン競技で銅メダルを取った栄光は、時代を経ても決して色褪せることはない。「人生は、長さではない」と言われる所以か。余談となるが、何を隠そう私は、円谷幸吉と同郷の福島県人なのだ。そういう見えざる吸引力が、あるいは今回、円谷との再会劇を果たしたのかもしれなかった。音声の中ではあったのだけれど。結果として若死にした円谷だが、本音は、まだ一途に走り続けていたかったと言っているような気がして、私には仕方がない。彼の無言の叫びが聞こえてくるようで、なお一層切なさは募る。

ところで、マラソン競技で一緒に表彰台に上がったエチオピアのアベベ・ビキラだが、後メキシコオリンピックに出場するも途中棄権。その後は、母国に戻り英雄として恵まれた立場にいたが交通事故で半身不随となり、四十一歳の若さでこの世を去った。一方、円谷と国立競技場に入りデッドヒートを繰り広げたイギリスのヒートリーはまだ健在で、当時のレース模様を振り返り、「円谷を抜こうと思ったときに注意したことと言うのは、ゆっくりと抜くのではなく、一気に、それも着実

に抜かねばならないということでした。彼を、もしリードしなければ、ゴールまでそのまま行ってしまったでしょう。いわば、私のこの五ヤードの距離が、彼が反撃するチャンスを無くし、また、彼を落胆させたものでした。私はいろいろ考えますが、彼の気持ちがわかるような気がします。一度栄光に出会って、再びその栄光を掴もうとしたとき、それを果たせなかったら大変失望することでしょう。彼の死に方は理解できませんが、私には、円谷のそのような気持ちが理解できます」と、コメントを残している。

さて、数あるテープの中から取り出したもう一本は、東京オリンピックから十二年経過した後のモントリオールオリンピック、体操競技の模様を録音したものだ。懐かしいことに、そこにはテレビの字幕を読み上げる若かりし頃の自らの肉声までもが録音されていて、それを聞くうちに、何か自分がその当時に一気に逆戻りしたような不可思議な気分にさせられたものだ。その声には明らかに若さが感じられ、またテレビの画面を食い入るように見つめる己の姿が、脳裏に鮮明に蘇ってきた。

思い返せば、当時私は器械体操に熱中していて、その頃日本体操陣も、オリンピック史上では華々しい活躍をみせていた。そんな影響もあってか、私はその試合模様を、しっかりとカセットテープに収めていたのだった。前のマラソン実況中継同様、興奮気味に話すアナウンサーの声に歓喜し、また時に涙したものだ。

そして御多分に漏れず体操競技においても、国境を越えた熱きドラマが繰り広げられた。

カナダのニューヨークと呼ばれるモントリオールに入った日本体操陣。そこに、試合前から大きな落とし穴が待ち構えていた。夕食時、旺盛な食欲をみせるエース笠松選手だったが、その夜激しい腹痛に見舞われ、最悪なことに盲腸炎で試合欠場を余儀なくされてしまったのである。さらなる悲劇はその後も日本体操陣に襲い掛かり、藤本選手までもが三種目目吊り輪の着地で膝の半月板を砕き、四種目目跳馬の助走直後で体が崩れ、競技中断となってしまった。

「日本としては、五人の得点が全部そのまティーム得点になります。一人の失敗も許されません」

緊迫したその時の状況を伝える、アナウンサーの声だ。出場ぎりぎりの五人で、宿敵ソビエトに向かわねばならなくなってしまったのである。

そして日本は最後の種目、鉄棒を迎えた。体操日本の命運が、塚原の、一分の演

技に掛かっていた。

「さて、日本の期待の塚原の演技が始まります。高さが十分あります。規定では0・5の差を付けられました日本ティーム。よく健闘して、四種目目に逆転です。さあ、どうでしょうか、新月面宙返りを行うか、やったー、決まりました。二回宙返り二回捻り。いわゆる、ムーンサルトであります。9・9が出ました。笠松を失い、そしてまた、藤本を失いながら、最後、跳馬からの四種目は、五人で行いました。この拍手を、そしてこの笑顔を、ご覧頂きましょう。一万六千のポーラムの観衆が、暖かい拍手を惜しみなく送っています。日本の男子体操陣、オリンピック史上初めての団体五連覇を成し遂げました」

わずか0・4ポイント差の勝利。絶望の中から這い上がった史上最強の男達は、悲劇と悪夢の狭間で闘いながら、女神から勝利を奪い取った。七人の侍の戦いは、オリンピック史上に残る奇跡の逆転劇として色褪せることなく、永遠に語り継がれるのである。

今回、幸運にも現実世界に蘇り競技再現を果たしたアスリート達だが、彼らに共通しているのは、皆己の限界まで挑戦し、極限状況の中で見事に勝利を掴み取ったということの事実であろう。これは何もスポーツ界に限ったことではないだろうが、どの分野でも、それなりの成果を上げるにはそれぐらいに精進しなければならないということなのだろう。

音声を記録した当初、私はまだ中学生で、相当に若かった。その時点では、まだ将来に対して無限の可能性を秘めているとも言えたかもしれない。でも、はや五十代の中年となってしまった現在、これまで歩んできた人生を振り返って、「我が人生に悔いなし」とは、どう考えてみても言えそうにはない。楽しいこともそれは中にはあったけれど、反面、いろいろな面で苦労してきたことも隠しようのない事実だ。今後、益々老年に向かって突き進んでいくことは避けられない現実だが、どうせ一回限りの人生だ。自分に正直に、背伸びをせず、悔いの無いように生きたいと考えている。

そんな折、嬉しいニュースが飛び込んできた。二〇二〇年夏期オリンピック開催都市が、我が母国、日本の東京に決まったという。その頃、すでに私は定年を二年後に控えた年齢に達しているのだが、穏やかな気持ちでオリンピック観戦が楽しめるよう、今から第二の人生のシナリオ作りに着手することとしよう。

佐藤　義弘

昭和三十六年生まれ　五十三歳
福島県いわき市在住
千葉大学工学部卒業